

<p>研究代表者</p>	<p>所属学系・職名 人間・生活学系・准教授 氏名 高橋 純一</p>
<p>研究課題</p>	<p>「暗黙の知能観」からみた能力の多様性 Diversity of ability and the implicit theory of intelligence.</p>
<p>成果の概要</p>	<p>1. 目的 共生社会（多様性）の形成が目指されている現状では、その実現のために、社会集団を構成する人々の能力の多様性が認められる必要がある。しかし、社会一般では、「素朴な知能観」が示すように、個別知能検査で測定できる知能指数を「能力」と定義する傾向にある。この定義だけを用いれば、例えば、知的障害児・者の能力は低いことになる。「障害者＝能力が低い」ことを示唆するものであり、障害への偏見・差別を助長し、社会参加が阻まれることにつながる。人々がもつ知能観は、障害児・者に対する偏見・差別の形成に影響を及ぼすものと推測できる。</p> <p>知能観研究では、近年、「暗黙の知能観（Dweck, 1999）」が提案されている。暗黙の知能観には2種類が想定されており、「固定的知能観（知能は固定的で変容しないもの）」および「拡張的知能観（知能は柔軟で成長できるもの）」である。例えば、拡張的知能観をもつ児童は学びに積極的に関わる（Dweck & Master, 2008）ことなど、暗黙の知能観を変数として、様々な活動との関連も指摘されている。</p> <p>拡張的知能観をもつ者は固定的知能観をもつ者よりも“知能を柔軟なもの”と捉えるのであれば、両者において、知能観を構成する因子にも違いが見られると推測する。そこで、本研究では、暗黙の知能観の観点から、固定的/拡張的知能観と能力の多様性との関連について検討する。そのうえで、知能観と障害観との関連についても言及したい。</p> <p>2. 研究①：テキストマイニングによる知能観因子の抽出</p> <p>2.1. 方法 調査参加者 大学生・大学院生 179名（男性89名，女性90名）が参加した。 質問紙 “頭が良い人”の定義について、自由記述による回答を求めた。 手続き 調査は講義内容に即して、講義時間中に集団で実施された。知能の定義（“頭が良い人”とはどのような定義か）について、参加者のペースで思いつく限り自由に記述するように求めた。</p> <p>2.2. 結果と考察 自由記述を用いてテキストマイニングを行い、得られたデータから主成分分析およびクラスター分析を実施した。結果から、「勉強ができる」、「知識がある」、「博学である」などに加えて、「行動力がある」、「臨機応変である」「周りへの配慮がある」などが抽出された。</p> <p>以上より、「勉強ができる」、「知識がある」、「博学である」などの個別知能検査で測定できる項目に加えて、「行動力がある」、「臨機応変である」「周りへの配慮がある」などの個別知能検査では測定できないような項目も抽出されたと言える。これらの結果から、知能観には様々な因子が関与している可能性が推測できる。</p>

<p>成果の概要</p>	<p>3. 研究②：暗黙の知能観（固定的知能観 / 拡張的知能観）が知能観因子に及ぼす影響</p> <p>3.1. 方法 調査参加者 研究①とは異なる大学生・大学院生 157 名（男性 44 名，女性 113 名）が参加した。 質問紙 質問紙は 2 種類から構成され，研究①同様に“頭が良い人”の定義について回答を求めた。また，「暗黙の知能観尺度（Dweck, 1999）」についても回答を求めた。暗黙の知能観尺度は 3 項目から成り，6 段階（強く思う～全く当てはまらない）で評定を求めた（評定点が低いほど固定的知能観を示す）。</p> <p>3.2. 結果と考察 まず，暗黙の知能観尺度の評定点（平均点：3.59）から，固定的知能観群（$n = 66$）と拡張的知能観群（$n = 91$）に分類した。 それぞれの群において，テキストマイニングを行い，得られたデータから主成分分析およびクラスター分析を実施した。結果から，固定的知能観群では「勉強」，「頭」，「記憶力」などの項目が得られた。一方で，拡張的知能観群では「勉強」や「記憶力」などに加えて，「発想」や「アイディア」などの項目も得られた。また，拡張的知能観群の方が，固定的知能観群よりも得られた項目数が多かった。 以上より，固定的知能観群では「勉強ができる」や「記憶力がある」など個別知能検査で測定できるような因子のみが抽出された。一方で，拡張的知能観群では個別知能検査で得られる因子に加えて，「発想力がある」や「アイディアがある」などの個別知能検査では必ずしも測定できない因子も得られた。両者において，知能観を構成する因子に違いが見られることを示唆している。拡張的知能観群の方が，知能を多様なものとして捉えている可能性が推測できる。</p> <p>4. まとめ 本研究は，暗黙の知能観の観点から，固定的/拡張的知能観と能力の多様性との関連について検討した。結果から，知能観因子として，個別知能検査で測定できる因子（「勉強ができる」や「知識がある」など）が主に抽出され，個別知能検査では測定できない因子（「行動力がある」や「臨機応変である」など）も抽出された（研究①）。また，固定的知能観をもつ参加者では「勉強ができる」や「記憶力がある」など個別知能検査で測定できる因子が主に抽出され，拡張的知能観をもつ参加者では，それらに加えて「発想力がある」や「アイディアがある」など個別知能検査では測定できない因子が主に抽出された（研究②）。以上の結果から，参加者には様々な知能観が存在するものの，素朴知能理論が示すように，個別知能検査で測定できる知能指数が知能観の形成に大きな影響を及ぼしていると推測する。また，拡張的知能観をもつ者は固定的知能観をもつ者よりも“知能を柔軟なもの”と捉えやすいことから，拡張的知能観をもつ者は個別知能検査で測定できる知能指数の影響を受けにくく，様々な能力を知能と定義しやすい可能性が推測できる。 知的障害に対する障害観（知的障害＝能力が低い）が，知能観を基礎として形成されているのであれば，本研究が示したように，拡張的知能観の有効性が示唆される。今後，知能観に関する研究を障害観にも援用することで，障害児・者に対する偏見・差別の解消に向けた障害理解の取り組みが展開できる。</p> <p>※ 調査内容の一部は，「高橋純一（2018）『日本におけるインクルーシブ教育とモンテッソーリ教育』日本モンテッソーリ学会第 51 回大会（特別講演）」において発表しました。</p>
--------------	--